

淳之介 赤とんぼ騒動 わが文学生活 1980～1981



潮出版社

赤とんぼ騒動

定価 九八〇円

昭和五十六年 十月 十五日 印刷

昭和五十六年 十一月 五日 発行

著 者 吉 行 淳 之 介

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮 出 版 社

〒102 東京都千代田区飯田橋三―一―三

電話 東京(03) 230230 〇〇七四一 (販売部)

振替 東京 五―六一〇九〇

本文印刷 大日本印刷株式会社

付物印刷 栗田印刷株式会社

製 本 東京美術紙工

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© J. Yoshiyuki 1981 Printed in Japan

目次

一九八〇年

久坂葉子のこと

川崎長太郎氏の文学

『昭和文学よもやま話』編者あとがき

幾つかの「二冊の本」

『恐怖・恐怖対談』あとがき

五味康祐のこと

「才能」と「運」と

感想

川端賞選評

『麻雀好日』ながいながい「あとがき」

ヘンリー・ミラーと私

「文化人類学」の講義を受けて

詩人の寓話

おくらの大家

興味尽きない荷風の日記

感想

芥川賞選評

桃井かおりのこと

私とわらべうた

『吉行淳之介娼婦小説集成』あとがき

映画「夕暮まで」を見て

長部日出雄『禁酒安兵衛』評

『吉行淳之介による吉行淳之介』あとがき

河野氏の存在と作品

92 91 90 88 86 84 80 79 77 76 71 68 66 62

利休鼠の雨

もう一つの「作品社」

ゴシップの限界

ヴェニスへの旅

なつかしい気分

初代編集長の弁

一九八一年

あるテストの結果

石川淳氏との一夜

感想

「弱い男」のおかしさ

年賀状

不思議な一夜

135 130 128 127 122 117

109 107 101 100 96 94

梶山季之の思い出

芥川賞選評

和田誠の似顔絵

マンガとわたし

追悼・立原正秋

踊り子

「幻に化す料理」集成

ロアルド・ダールの『あなたに似た人』

新宿・尖端の街

『谷崎潤一郎全集』を推す

豊作の年

感想

「好色一代男」とエロチシズム

「他人の自由」から「帰路」までの交際

赤線と遊廓

赤とんぼ騒動

芥川賞選評

初出一覧

224

222 219 215

装丁

前川
直

赤とんぼ騒動

わが文学生活一九八〇―一九八一年

一九八〇年

久坂葉子のこと

二十八年前、久坂葉子が鉄道自殺をとげたあと、当時新進気鋭の幾人もの作家が彼女のことを小説に書いた。それらの作品のすべてと、そして彼女自身の十九歳のときの芥川賞候補作「ドミノのお告げ」を私は読んだが、いまはそのすべてが朧げである。ただ、久坂葉子という名は、写真でしか見たことのない彫の深い美しい顔とともに、今にいたるまで時折ふつと頭の中に甦り、同時に私自身の青春の記憶も掠めてゆく。その記憶はつねに暗く、そして懐しい。

(四月)

川崎長太郎氏の文学

川崎長太郎氏の文学は、なつかしい文学である。最近作を読んでも懐しい気分になってくる。「なつかしい」という言葉には幾つかの意味があるが、私の言うのはそのすべてをひくめるものである。つまり「心がひかれ・親しく感じられ・いとしく・ゆかしく・思い出して慕わしい」ということになる。

これは、以前私が心をこめて愛読した「抹香町」の一連の作品や、氏自身の人柄によるものでもあろうが、それだけではない。氏はわが国の「私小説」の代表的作家の一人ということになる。そして、私小説というのはわが国の風土にかなった「詩」のようなもの（もちろん、氏の作品は十分に「散文」であるが、にもかかわらず）だという見解を氏の作品を読んでいると受入れないわけにはいかない。その作品群は、土に密着し、きびしく、やさしく、そしてさらにいえば典雅である。

（二月）

『昭和文学よもやま話』編者あとがき

十返肇の十七回忌がおわって間もなく、潮出版社の能登谷寛之氏から電話があつて、この三十五年間の匿名コラムの文章を選び出して、『昭和文学よもやま話』という本を出したい、と言った。

その企画には、山本容朗氏も加わっていたとおもうが、「それは名案だが、どうせのことなら十返肇だけの文章でまとめれば、いい供養になるのだが」と言ってみた。私のその提案に二人は賛成して、匿名だけの枠をはずして纏めたのが、この本である。

その実務は、山本・能登谷の両氏が丁寧に集めたものから選んでくれ、作品の間の重複エピソードを削る作業まで細心におこなった。

十返肇氏と私との関係は、本書に収録した「実感的十返肇論」にくわしいが、近年あのような十返タイプの評論家を懐しむ声が高まっているムキもある。なによりも、十返肇は日本の雑誌小説を読むのが大好きだった。その氏がいま生きていたら、現今の雑誌小説につき合い切れ

ただろうか。

私の想像では、やはりあらかた読んでしまい、なにやかやと悪口ばかり言っていたような気がする。

それにしても、十返肇よりもう七年間も私は長生きしてしまった。一つには、氏があまりにも早く死に、私のほうは予定以上に長生きしている、ということだろう。

(五月)

幾つかの「一冊の本」

いまこの机の上に、一冊の本をもってきた。横長の変型で、右のページには五号活字がゆつたりと並んでおり、左の全ページはすべてペン描きの稚拙風で雅趣のある絵である。全部で百十六ページ、この中に三つの短篇が収められている。

白い厚表紙の中央に、「年を歴た鰐の話」と茶色の文字が捺してあり、その左右に銀色の文字がやはり捺してあって、「レオポール・シヨヴオ原作 山本夏彦翻譯 櫻井刊」とある。オクヅケは、「昭和十六年七月五日発行、昭和二十二年三月二十五日四版発行。定価金三十円」